

# James Joyce の

## 「死者」(THE DEAD) について

本 田 和 也

### I 成 立

James Joyce は1906年から1907年にかけて、Rome に滞在していた。Trieste には彼の弟の Stanislaus がいた。Rome における彼の生活は難澁をきわめていた。生活はアルコールのために破綻をきたす一方であった。Rome で、彼は T. S. Eliot のように銀行員になって、活計の支えとした。が、その生活は妻子を扶けて行くのに決して充分ではなかった。Joyce は Stanislaus に盛んに金をせびった。弟の同情を得ようとして、妻 Nora と Giorgio の飢える姿をスケッチして、弟にその絵を送って無心した。ホテル代が支払えず、遂に親子共々ホテルの一室を追い出される一幕もあった。Stanislaus は兄からの金の無心の手紙がある度に、Joyce がアルコールにふけていると直観した。放縦で、父 John Joyce にとっては正に放蕩息子の自己破壊的生活は続いた。Rome は彼にとって不快きあまりない生活環境でしかなかった。

以上は Richard Ellmann の伝記にある Rome での生活を要約したものである。Ellmann は『ダブリンの人々』(Dubliners. 1914)の最後に配列された短篇小説「死者」(The Dead)がどの状況で書かれたかを詳らかにした<sup>(1)</sup>。それによると、彼は「死者」を Joyce の新しい認識の具現であると見做し、「死者」を書く特別の理由が作者側にあったとする。異郷にいて、Joyce は自分が Dublin の人間であることを学んだといい、「死者」は彼の亡命の最初の歌であるとの結論を出した。

Stanislaus 宛の Joyce の書簡に窺われるように、Joyce は Rome に滞在中、アイルランド的風景を心に描くことが繁々あつた。

「ときどきアイルランドのことを思うと、ぼくは必要以上に苛酷だったようだ。ダブリンの魅力を何ひとつ再現しなかったね。(少なくとも『ダブリンの人々』のなかでは) パリのほか、ダブリンを去ってからというもの、どの都にいても気が安まらなかったからだ。その巧妙な島嶼性とかそのもてなしのよさをぼくは再現したことはなかった。ぼくの見限り、後者の徳性はヨーロッパのどこか他の処にもない。ぼくはその美しさに公正ではなかったね。というのは、ぼくの意見だが、イギリス、スイス、フランス、オーストリア、イタリーで見たよりも、当然ダブリンは美しいからだ。』

(...Sometimes thinking of Ireland it seems to me that I have been unnecessarily harsh. I have reproduced (in *Dubliners* at least) none of the attraction of the city for I have never felt at my ease in any city since I left it, except in Paris. I have not reproduced its ingenuous insularity and its hospitality. The latter 'virtue' so far as I can see does not exist elsewhere in Europe. I have not been just to its beauty: for it is more beautiful naturally in my opinion than what I have seen of England, Switzerland, France, Austria or Italy....)(2)

自己破壊作用に似た苦しい生活のなかで、徐々に深まっていった Joyce の洞察力がこの書簡に行きわたっている。この洞察力が「死者」の卓越した描写力になって現われ、彼独自の風刺が短篇を彫琢していった。引用した書簡の皮肉な語りかけは、「死者」の執筆に大いに関係している。美德についての言及は文字通りにうけとめられない程の痛烈な言及である。

「死者」は書簡の島国根性やもてなしのよさを美德として率直に扱い、かつそれを主題にした小説で、『ダブリンの人々』のなかで独特の位置を占め

る。小説の構成が中篇程度であることも強いていえば「死者」の特徴である。作品がその意図にあるノスタルジアをもっていたことは否めないが、作品の心理的要因を把握するために、Joyce の生来の嫉妬の感情が要請される。実に、嫉妬の感情は作品の主たる感情になっているので、嫉妬の上にこの作品は成立していると錯覚することがある。「死者」の作品の重心が、次第に夫妻間の心理描写に移っていくのにつれて、このことは一段と明瞭になる。Joyce が Ireland に行ったときの事だが、Ellmann はある事件を書いた。Joyce の学生時代からの友人 Cosgrave から、Cosgrave が Nora と逢引きしたことが昔あったのだという話を聴き、Joyce は自分が欺されたとは知る由もなかったので、二人の逢引きを本当たと信じ、妻の不貞に悩んだ。挙句の果、彼は Trieste の Nora に手紙を書いて、散々に彼女の非を責めた。Cosgrave の卑怯な嘘話であったことが後になってわかった。Cosgrave は彼の性情を充分に見抜いて、Joyce を蹴り落そうと嘘話を仕組んだ。Joyce には唯ひとつの戯曲『追放された人々』<sup>(3)</sup>がある。「死者」について論述するために、この戯曲を一瞥する。Joyce の作意に嫉妬を心理的に多様に屈折させて眺める操作を戯曲に見いだすからである。

全制度の変革を夢見る Richard という男は九年前に今の妻君 Bertha とイタリーに亡命し、作家になった。Bertha は子供を産んだ。Richard は故国に友人 Robert Hand と彼のいとこ Beatrice を残して来た。九年の年月が流れ、Richard 一家は故国に帰った。Beatrice は Richard の良き理解者で、異国にいた彼と八年間文通していた。一方 Robert Hand はジャーナリストで、Bertha を愛していた。Richard は Robert が Bertha に愛を告白したことを告げられている。Bertha は Richard が Beatrice に惹かれていたと直観した。Richard は Robert に Bertha の青春を台無しにしてしまったというが、Robert は Bertha の美しさはきみのお陰だという。Robert は Richard に Bertha への恋慕を許してくれたことに感動しているという。Richard は妻 Bertha と Robert に裏切られたかたと告

白する。彼は故意に Bertha に不貞を働かせることによって、嫉妬の思いを借りて、青春を夢見ていた。Bertha は密会のときの Robert の衝動的な振舞を楽しんでいた。Richard は別に密会のことで Bertha を責めたり、怪しむことがない。Bertha は不安になって、結局夫の許に帰る。

この戯曲は単に、‘adultery’を問題にした戯曲とは違う。作者の覚え書にあるように ‘Sadism’ と ‘Masochism’ との間でごちゃまぜになっている。Bertha は嫉妬という感情を憎しみや悩みとは切りはなして考え、嫉妬のなかに情熱を見だして、一方 Richard の嫉妬は、さらにその本質に近いものであって、憎しみからはなれて、嫉妬の悩みを肉体的な刺激に転換させるという、作者の言葉を中心に考えると、‘adultery’の罪意識は後退し、逆に生の中核に近づく。生の中核で燃焼し尽す筈の嫉妬に深く根差した ‘adultery’ でなければ無意味なのだ。それは徐々に明らかになっていくところの肉体の怖れであり、肉体の悲しみに裏書きされるものであった。嫉妬という心理的屈折の多様さが作品に反映し、作品が複雑な心理にうごめく例を『ポウムズ』詩集に見るが、この心理によって、殆ど詩集は自虐的なイメージに凝集される<sup>(4)</sup>。

さて『追放された人々』の女性 Bertha は Gerty MacDowel,<sup>(5)</sup> Gretta, Molly Bloom であるとされている。Bertha の少女時代は Gerty MacDowel が果している。美しい雪花石膏の手をした Gerty は Sandymount 海岸で、‘Cocue’の危機に立たされている Bloom の憂愁に心を動かして、夢のなかで Bloom に近づく。Bertha の密会は Gerty の少女らしい心理を説明している。さらに Bertha が「死者」の Gretta であることは最早疑いの余地はない位だ。Gretta は自分のために死んだ青年の愛を秘密にしておいた。その秘密が知れたとき、中年の夫 Gabriel は、Richard のように妻の青春を憐憫の情でいたわるが、そのために却って Gretta の真実の愛を嫉妬の思いによって得たいと思っている。

Joyce は25才か26才の青春の盛りのうちに、その発瀾とした時期をとお

して、青春の喪失を賢明に予知して「死者」を書いている。彼はうつろう青春の束の間の歓びや速い足どりをした時間を直ちに握える。微かな時間の変化に対応し、刻々に移ろう林羅万象に、つねに、彼は鋭い直覚力を示していた。

## II 概 要

恒例のクリスマス・パーティは30年続いている<sup>(6)</sup>。主宰者は伯母の Kate と Julia と若い Mary Jane だった。Gabriel 夫妻はそれに招かれていた。Gabriel は善良で、大学で語学教師をしている。伯母達がしびれを切らしているところへ、Gabriel 夫妻が着いた。管理人の娘の Lily が世話をやいていた。Lily は学校を終えて一年以上になる。Gabriel の愛想のよさが、つい口を滑らせて、近い将来、結婚式に出席するようだねとうかつにいった。Lily は「今時の男って皆口が巧いわ。女からとれるものは何でも巻き上げてしまいわ。」(The men that is now is only all palaver and what they can get out of you!) と痛いしっぺ返しをする。そのあとで Gabriel は彼女にクリスマスだからといって、なにがしかの金を握らせる。娘は当然のように断った。彼は気恥しさに赤らむ。Lily の予期せぬ反撃に辟易して、恥しく思った Gabriel は、用意してあった演説の内容が急に気がかりになった。秘かに彼が怖れたのは、その場合に居合わせている無教養の人々に理解される見込みのない話をして、笑い草になるということだった。

赤ら顔した若い女が、カドリールズ! と叫んでいた。華やいだ雰囲気のうちに舞踏会が Mary Jane のピアノの伴奏で始まった。ピアノの上の壁を見ると、Gabriel の母の写真が飾ってあった。母は Gabriel の結婚に反対した。Gretta のことを田舎の小利口者 (country cute) だといって非難した。彼はそのことを思い出すと、腹立たしくなった。

たまたま Gabriel は愛国主義者の Ivors と組んでランサーを舞る板目になった。舞踏の合い間に、右翼系の新聞 'The Daily Express' に G.C の署

名があるが、誰れなのと Ivors が訊く。彼女は署名が誰かを知っていたから風当りはきつい。彼は安い金でその文芸欄を担当していた。Ivors は彼をイギリスかぶれ (West Briton) だと呼んだ。彼は腹のなかで、文学が政治にまさと信じていた。Ivors は冗談いっただけよという。彼女は彼にアラン島行きをすすめる。彼にはその気がない。Gretta が西部 Connacht の出身であるのを知っていた若い Ivors 嬢は彼を詰った。

「で、何故フランスかベルギーに行くの」とイヴァーズ嬢が云った。「自国を訪れないで。」「さあ」とゲイブリエルは云った。「半ば様々な言語と接解するためだし、半ば気分転換のためさ。」

‘(And why do you go to France or Belgium’, said Miss Ivors, ‘instead of visiting your own laud?’

‘Well’, said Gabriel, ‘it’s partly to keep in touch with the languages and partly for a change.’

あまりの訊問に Gabriel は自分の国にはうんざりしたよといって Ivors の機嫌を損う。話は決裂に終わってしまう。Ivors との対話は、Lily との対話に劣らず不快であった。そのときの Gabriel のたじろぎは骨稜に見えた。彼は Ivors との不愉快な出来事のあったことを払い退けようとした。冷たい窓ガラスに彼は指を当てる。この幻想は作品の伏線として、Gretta の出身地 Connacht と同様に重要で、後半部の眠りの場面で、再び浮び出る雪に結合する描写となった。

「ゲイブリエルの暖かい震える指が窓の冷たいガラスをたたいた。外はどんなに冷たかろう。先ず河沿いに、それから公園の中をひとりで歩いたら、どんなに愉快だろう。雪は樹々の枝に積って、ウエリントン記念碑の天辺に明るい帽子をのせているだろう。夕食を囲んでいるよりそこにいる

方がどんなにか愉しいだろう。」

(‘Gabriel’s warm trembling fingers tapped the cold pane of the window. How cool it must be outside! How pleasant it would be to walk out alone, first along by the river and then through the park! The snow would be lying on the branches of the trees and forming a bright cap on the top of the Wellington Monument. How much more pleasant it would be there than at the supper-table!’)

Gabriel の短兵急な氣質が再三にわたって、自制か周囲の圧力かによって、爆発したりしないで、静かに退行する。したがって Gabriel のいら立ちや憤怒が周囲をひどく困惑させることがないと云える。この点は「死者」が他の短篇小説と著しく異っている点であろう。

彼は食事のとき一同に向って演説し、伯母達をダブリン音楽界の三女神にたとえ、讃辞を送り、アイルランドの伝統にある歓待の精神と人間性を説いた。Ivors がその場にはすでにいなかったのが残念だった。彼女にたいする当てこすりも役立たなかったからだ。夜更けて散会し一同が戻っていく。

玄関先で、Gabriel は伯母達の大嫌いな酒飲みの Freddy Marin を冗談を飛ばしながら、見送っていた。小止みなく雪が降っている。彼は Marin を送り出したあと、階上にふと目を移す。Gretta が見えた。彼女は遠い音楽を聴いているようだった。何の曲か彼には解らないが、その姿は絵のようだった。皆の前で、歌わなかった D’Arcy が歌っていた。跡切れがちに歌が聴える。Gabriel が二階に行くと、突然歌は止んだ。Gretta は D’Arcy に何の歌か訊ねると、彼は「オーリムの乙女」(The Lass of Aughrim)<sup>7)</sup>だと答えた。作品はこの歌をきっかけのひとつにして、Gretta の愛の egoism で占められる後半に急速に入っていく。

朝はまだ暗かった。Gabriel 夫妻は Bartell D’Arcy と一緒に連立って

伯母たちに別れを告げた。Gretta は夫の前を楽しげに、ずんずんと歩いていった。と突然、彼は甘美な新婚旅行のときのことを追想していた。ヘリオトロープの封筒が朝食用の茶碗の傍らにあった。彼はそれを撫でていた。鳥が常春樹の上で囀っている。彼は幸福のあまり食事が出来なかった。あの人混みのホームに二人で立っていたことを思い出していた。彼は無意識のうちに過去と現在の間に横たわっている溝のあることを経験する。

「さらに一層やさしさのこもった喜びの波が彼の心から出て、暖かい氾濫になって彼の動脈をめぐっていた。星々のやさしい焰のように、だれも知らなかったし、また決して知らない、二人きりの生活のひとつがと現われて、彼の記憶を照らしていた。彼はあの時を彼女に思い起させ、一緒に退屈な生活の歳月を忘れさせ、二人の法悦の折節だけを憶えておかせたかった。」

(A wave of yet more tender joy escaped from his heart and went coursing in warm flood along his arteries. Like the tender fire of stars moments of their life together, that no one knew of or would ever know of, broke upon and illumined his memory. He longed to her recall to those moments, to make her forget the years of their dull existence together and remember only their moments of ecstasy.)

Gabriel は兎に角グレシャムのホテルで二人だけになりたかった。音楽的で、妙な、よい匂い<sup>⑧</sup>の Gretta の肉体を切ない思いで愛そうとしていた。彼女は疲れているようだったが、優しかった。「あなたってずいぶん寛大な方」だと彼女はいった。突差に彼女はよろめくようにベッドに身を投げて、泣き出す。かつて Gretta を愛していた、死んだ青年はよく「オーリムの乙女」を歌っていた。D'Arcy の歌が、Gretta に忘れられなかった。その青年は Gretta の過去の埋れた生活であった。したがって、過去の生活の闖入が、現実の重たさになって Gabriel の身に迫るのだった。彼は死

んだ青年の闖入を止めることが出来ないようだ。微笑したり、皮肉に、また冷やかに、Gretta にいろいろのことを訊いて、それを食い止めようとするものの、彼女の愛の egoism にどうしても勝てない。一気に彼は敗北にさらされるのだった。征服欲に端を発した彼の微笑も消えていたし、嫉妬に根差した怒りもなくなって、憐憫の情に変わっていく微妙な感情の変化を彼は知っていた。彼の卑俗な精神は、Joyce の散文の表現力によって、ひとつひとつ顕示された。彼を待っているものは、辛い試練であった。「ガス会社につとめていったの」という彼女の答えがはねかえって、彼の気恥しさが一層ひどくなり、長い間彼女がこころのなかで、彼と若者とを比較していたと思うと、耐えがたい程苦痛だった。彼は自己嫌悪に陥って、自責の念につきまとわれる。得意気に、すっかり彼女を征服したと思い、また彼女が夫だけを愛していたとばかり思っていた自信が崩れたときに、恥しい自己意識におそわれたのだった。

「気恥しい自己意識が彼をおそった。彼は自分が伯母たちの使い走りの少年のように振舞ったりした愚か者に見えたり、俗物たちに演説をぶったり、自分の道化じみた情欲を理想化したりした、神経質な、良い意味の感傷家に見えたり、鏡の中にうった憫れむべき間抜けな奴に自分が見えた。彼女が彼の額に燃えた気恥しさを見ないかと心配して本能的に彼は光りにいっそう背を向けていた。」

(A shameful consciousness of his own person assailed him. He saw him-self as a ludicrous figure, acting as a pennyboy for his aunts, a nervous, well-meaning sentimentalist, orating to vulgarians and idealising his own clownish lusts, the pitiable fatuous fellow he had caught a glimpse of in the mirror. Instinctively he turned his back more to the light lest she might see the shame that burned upon his forehead.)<sup>(9)</sup>

彼は諦めてなお彼女の愛の告白に聴き入るのだが、二人の対話で心理内奥の見えない隔りの部分が、ことごとく明瞭になった。「彼はわたしのために死んだと思ってるわ」と彼女が答えたときから、安心したかのように、昔を語り、Gabrielの質問の余地はまったくなくなった。彼女はむしろ快活に昔の恋を語っているようだった。Michael Fureyという美しい声の持ち主で、彼は健康を損ねていたが、彼女がGalwayを去る時に、病状が悪化しているのに、夜、雨の中を会いに来て、庭の隅で雨に打たれながら、震えて立っているのを彼女は見たという。それから彼女は涙にむせて、言葉をつまらせる。彼女をそっとしておいて、夫は静かに窓ぎわの方へ歩いていった。彼女は眠っていた。彼女が少女らしい美しさに溢れていた時分はどんなだったろうと想像すると、自然に憫れになり、次第にその憫憫の情だけが本当らしく思われるようになる。Fureyも彼と同様に彼女の犠牲になったのだからと思えば、慰めになる。Grettaへの愛に殉じたFureyにたいして憫憫を覚えるのは当然であった。彼の本心はGrettaが今度は彼に情熱を燃してくれることへの期待にあった筈だ。それ故に、眠りについた妻の傍らにいて、愛の本質である殉教性をひそかに考えていた。

「部屋の空気が彼の肩を冷やした。彼は慎重にシーツの下に身をのべて、妻のそばに横たわった。一人また一人と、彼等はみんな影になっていく。年をとって、陰うつに、衰え、しおれるよりは、いくらかの情熱の盛りうちに、大胆にあの世になる方がました。自分の傍らに横たわった彼女がどうして、何年もの間、彼女の恋人が生きたくないのだと彼女に語ったときの彼のあの眼差しを心にとじこめていたかを彼は考えていた。

「グィブリエルの目にいっぱい涙がたまった。彼はどの女にたいしてもそのように決して感じなかったが、そのような感情が愛であるに違いないと彼は知るのであった。」

(The air of the room chilled his shoulders. He stretched himself cau-

tiously along under the sheets and lay down beside his wife. One by one they were all becoming shades. Better pass boldly into that other world, in the full glory of some passion, than fade and wither dismally with age. He thought of how she who lay beside him had looked in her heart for so many years that image of her lover's eyes when he had told her that he did not wish to live.

Generous tears filled Gabriel's eyes. He had never felt that himself towards any woman, but he knew that such a feeling must be love.)

彼はシャノンの波の上や裸木の丘々の上や Furey の眠っている墓の上や生きている人々や死んだ人々の上に、小止みなく降りしきっている雪を外に想像しながら、いつしか眠りについていた。

### III 作品の意味するもの

「死者」の全体の $\frac{1}{6}$ 程度の頁数のなかで、急速に折畳むように描いた、Gabriel 夫妻間の激した感情の微妙きわまりない心理の動きの克明な描写にともなうところの真実性は、『追放された人々』を凌ぐほど完璧であった。主人公の嗜虐的な、と同時に自虐的な性癖と卑俗さが、人間の臆んでいる顕在心理の暗い内容を示すのだが、それらはアイロニーによって、複雑にごちゃまぜになり、いささかの滑稽味を交えて語られている。

「一人また一人と、彼等はみんな影になっていく。年をとって、陰うつに、衰え、しおれるよりは、いくらかの情熱の盛りのうちに、大胆にあの世になる方がました。」

と Gabriel は妻を見て、死んだ Furey の愛の告白を想像すると、自然に目にいっぱい涙がたまった。彼はそのような感情が愛であるに違いな

いということを知ったと Joyce は彼の思想をこう叙述した。この叙述にあった思想は大胆に現実受容の方向に Gabriel を向わせているが、思想の背景に、Joyce 自身の内的必然性があったことは確かであって、作中の Gabriel の自己の情熱にたいする焦燥感がこの文章の躊躇の感じに現われている。文章は、いま Gabriel が新たに妻の秘めていた愛欲の大胆さと新鮮さに不思議にかり立てられようとしている状況を描写する。妻の告白によって啞然と惨めな敗北感を味わされ、Furey に嫉妬を覚えた Gabriel は、次第に Furey のように Gabriel の愛の祭壇<sup>101</sup> に近ずこうと思っていることを、緩慢な表現が暗示している。Gabriel は Gretta を避けつつ、彼女の愛をとり戻すことに無意識の努力を払っていたのだから、Ellmann の指摘するように、物語のなかで特別の意味をもつ西部、コノートへの旅が実際に行われることになるであろう。つまり Gretta の過去の生活体であった原始的で、粗野な、衝動的な土地 (the primitive, untutored, impulsive country)<sup>102</sup> アイルランド西部と Gabriel の思想が一体になる可能性がある。Gabriel の優柔不断の性格が Gretta の愛の egoism に直面して、はっきりと内面の怖れをさらけ出したとき、ある諦めの感情をもって、彼は死せる人々の生への闖入を黙認することになった。彼が死せる人々の闖入を認めたので、Furey が自分と同じであることを知って、眠りにつく瞬間に、彼は Michael Furey のように Gretta の肉体に戻って行き、その豊かな愛に殉ずることを待ち望んだのであろう。Joyce は『追放された人々』の覚え書のなかで、Bertha という女性を、暗い、形のない地であり、母である。月光に照らされた夜に美しくなった母で、彼女は暗に自己の本能を意識するだけなのだといったことがある。この覚え書から Joyce にとって、西部が明らかに象徴の意味合いにおいて、Gretta の肉体を表わすということが出来るであろう。いまや Gabriel は Gretta の生活全体をうけとめるために、彼は Gretta からの疎外の感情を払いのける必要にかられ、Gretta の愛情に大胆に溺死する怖れをとり去らねばならなかつ

James Joyce の『死者』(THE DEAD) について

た。作品はそれを予知するだけであり、暗示するのであった。「死者」は、Joyce が肉体の悲しみへの畏怖を異様に鋭い感覚で引きとめている以上、新たな感覚的な、情緒的な経験の現実性の重たさや暗さを避けられないものとして予測した。「死者」の Gabriel と Gretta と Furey の三者三様の関係のしかたは、その意味で『ボウムズ』詩集の様々な情緒にとって欠くことの出来ない要素になった。「星々のやさしい焰」に象徴された主人公の青春の法悦は、「粉碎されて」の主人公の辛らつをきわめた詩句、

鳥のいない天、海の黄昏、西の方をつき刺すひとつの孤独の星

のなかに消える。思うに、「死者」における作家の青春性は、Gabriel の内省であったところの「いくらかの情熱の盛りのうちに、大胆にあの世になる方がました。」という独白を許した点にあるが、Joyce の人間的真実には現代人の孤独な云い知れぬ寂寥感がただよう。この寂寥感は 'adultery' の心理的に有徳の戯曲『追放された人々』によっても埋めつくせないのであったと考えられよう。

註

1. Richard Ellmann. James Joyce. pp. 220—231.
2. *ibid.* P. 239.
3. *Exiles.* について、尾島庄太郎著『現代アイアランド文学研究』北星堂刊を参照したことを付記する。
4. 拙稿、「英米学研究」No. 3
5. 拙稿、「ほらいずん」4号
6. Florence L. Walzl は、恒例のクリスマスパーティーは十二夜、一月六日であろうと推察している。
7. この歌のオーリムという地名は、ゴールウェイ附近の寒村で、1691年、イギリス軍とアイルランド軍との間で戦闘がかわされた古戦場である。歌はグ

レゴリー侯につれなくされた百姓娘の悲しい歌である。

8. Joyce の Nora 宛の書簡に使ってある三つの形容詞である。
9. この自己意識は、'Araby,' 'An Encounter,' の少年の自己意識を想起させる。
10. Richard Ellmann は、Gabrielについて次のように語っている。

“To some extent Gabriel too is dying for her, in giving up what he has most valued in himself, all that holds him apart from the simpler people at the party. He feels close to Gretta through sympathy if not through love; now they are both past youth, beauty, he feels close also to her dead lover, another lamb burnt on her altar, though she too is burnt now; he feels no resentment, only pity.” James Joyce, p. 259

なお David Daiches は Gabriel の egoism が敗北する過程で、『若き日の芸術家の肖像』への崩芽を観察し、Hugh Kenner は「死者」と T.S. Eliot の詩「荒地」とを比較し、都市生活における人間の魂の頹廢の一種の症候群として作品を捉えている。

11. Richard Ellmann. James Joyce. P. 258